

名著頻發の工學出版界

地震と建築

工學博士 眞島健三郎 著

耐震建築構造に就ては建築學會と土木學會などが相提携して研究しなければならぬのであるが、技術家の夾量と言ふか、或は此の問題が無圖々しい大問題である爲か、其邊がウマク運んでゐない。政府に於ても震災豫防調査會を設けて數十年來調査研究はしてゐるが、それに依つて耐震構造上の纏つた決論には達してゐない。幸に我學界に佐野利器博士の如き自由研究家があつて耐震構造に就て曾て自己の研究を解放して論壇を賑はされたのである。其當時我が眞島博士と佐野博士が堂々と其所信を建築學會の講演會に闡はされた事は實に我國工學界の因習を破つた空前の名譽ある出来事であつた。當時の講演は建築學會誌に速記録として遣され、今以つて各方面の參考に資せられてゐるものである。『地震と建築』一冊の中には勿論當時の所論を一層分り易く收められてゐる。

○

現在施工されてゐる所謂耐震構造は工學上の大なる謎である。眞島博士の徹底的な技術的信念は此の大なる謎を謎として放置して置く事は出来なかつた曰く『吾人が此問題を解決し得ず、多くの累を次代に遺すが如きことあつては、兒孫に對する一大脅威で臍甲斐なき限りと思ふ。又一技術家としても憶面もなく自信なき工事を進行するは、人知れぬ大きな苦痛で耐へがたきものがある云々』此の信念の下に於て老來博士の健筆は輝いて行く、謙遜な博士は本書の内容を説くに『學理的解説は務めて誤謬を避くると動力學の参照に便せんが爲めに注意したつもりである。又耐震構造の目標として進むべき地震の大小性質についても別に一章を設けて置いた。尙剛柔建築の利害については諸家の意見に敬意を表し慎重に考慮したつもりである』云々と云ひ、また

『要するに耐震構造の根本問題は地震動に依つて家屋の下底が動かさるゝ場合、上部は如何なる震力を感じ受するか其量は如何、其分布は如何である』として混沌たる工學上の謎の世界に一大光明を投じたも

のである。内容は

○

緒論、耐震構造論の過去と現在

第一章、地震と其標準

第二章、彈性體の振動

第三章、矩形架構々造と應力計算法

第四章、震力

第五章 應用例題と剛柔建築の利害

第六章、建物震害の考察と耐震構造

以上各章を數節又は十數節に分類叙説され、時に計算式及び圖表等を加へ、最後に博士の説を立證すべき大正十二年の大震災被害の實狀に就て一々寫眞を添付されてゐる。

本書の論旨は曾て土木學會誌及び建築學會誌に發表せられたものもあるが、妥に從來の研究及び論文を大成して本書一冊に收められたものである。

眞島博士は海軍省建築局長として既に國防上重要な幾多の工事を竣成された人である。其工事は何れも軍事上の機密に屬するを以て一般には廣く知られてゐないが、合理的なる設計と施工とは實に世界に誇るべきものが多いのである。有名なる船渠工事や石油地下タンクに混凝土井筒を利用せられたる工法などは本誌が先に報道した如く、技術上の世界的傑作である。

○

今日博士の『地震と建築』一書は實に現代の一般工事關係者、特に鐵骨鐵筋混凝土構造に關係ある技術家の必讀を要すべきものであるばかりでなく、實に後代に遺すべき偉大なる著述である。

菊判二百十五頁附録寫眞及び圖表十六頁總クロス（定價金參圓九善發行、送料金十八錢添付振替にて申込あれば工事畫報社にて便宜取次）

